本場宇治　そして京、花の田舎

後半は宇治・京都型を取り上げる。残念ながら、江戸時代の宇治茶商の引札はほとんど収集できていない。ただ、幕末から明治にかけて宇治茶業界、いや日本の茶業界を技術的な面で支えた上林松寿（一八三二～一九一五）という人物が、たまたま明治一〇年代に宇治に拠点を置いた茶商の価格表を収集しており、近年それらを調査する機会にめぐまれたことから、まずはそれを起点に話を始めよう。

上林松寿

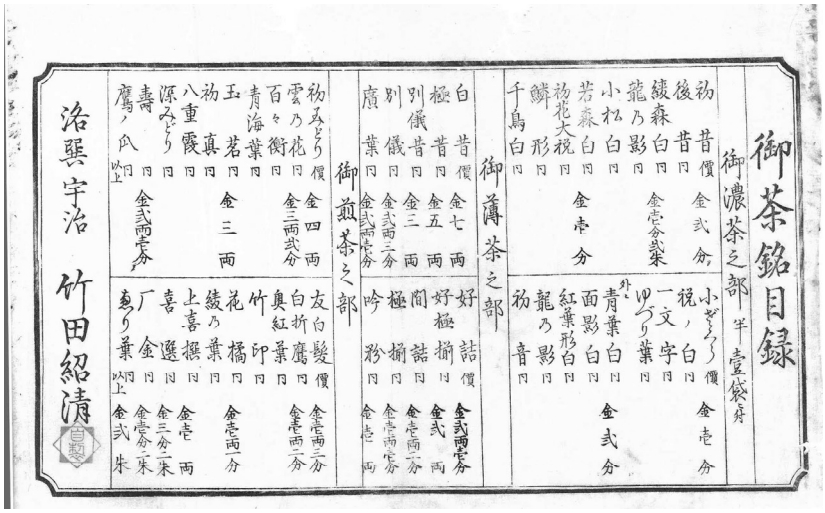
上林松寿は、御用茶師の上林牛加（ぎゅうか）家の第一一代当主で、茶の木の栽培から製造まで幅広く精通し、製品を鑑査・審査する能力も備えていた。意外に思われるかもしれないが、旧茶師の系譜に連なる人として、こうした技能を持ち合わせることはきわめて稀有な例である。御用茶師といわれる人たちは、たんに仲介を業とするのみで、おおむね茶の実務には頓着しない。

松寿は、茶師としての立場にあった二〇歳頃、幕末期には江戸との往復を何度か経験していた。そして詳しいいきさつは不明だが、維新後単身東京に出て内務省勧業寮に出仕し、輸出の花形となった茶業指導の一端を担うことになる。その後臨時の嘱託勤務だったが、農商務省に技手としても出入りした。横浜で開催された明治一二年（一八七九）の第一回製茶共進会では、東多摩郡下高井戸村（現杉並区）で紅茶の栽培・製造に関わり、その出品者としても名を連ねた。上林と言えば、聞く人が聞けばその当時でもすぐに宇治の高級茶がイメージされたはずだ。世界に向けた上林ブランドの紅茶を期待する向きが、彼のまわりにいた政府実務官僚のあいだにはあったのかもしれない。

上京前から、東京に長居することがきまっていたのかどうかは定かでないが、明治二二年（一八八九）に帰宇するまで足かけ一五年に及ぶ期間、基本的には東京を拠点とし、ほぼ全国を股にかけて茶業指導に奔走し、品評会では審査員も勤めた。いっぽうこの間、彼は宇治ではとても経験できない都会の下町暮らしを堪能することができた。しかも、明治一六年には次男敬次郎が東京法学校（現法政大学）に進学することになり、在京後半期は二人の共同生活となった。ちなみに、松寿は慶応元年（一八六五）三三歳のときに結婚し、その後五人の男子に恵まれた。松寿、敬次郎のもとに、たまには他の兄弟も入れ替わり顔をのぞかせるといった具合で、牛加家の人びとは維新後間もない東京の風をまとって成長することになる。

そんな松寿は、大量のチラシ、ビラ、レッテルの類を東京から宇治に持ち帰った。食料品から薬品、生活雑貨に至るまで、みな日々の暮らしを物語る品々だが、そこに本報告書で扱っている引札、とくに宇治茶商のそれが含まれる。なかには宇治で入手したものもあるかもしれないが、基本的には明

治一〇年代の東京での収集とみてよいと思われる。全国各地に雨後の筍のように茶業地が誕生し、また「宇治製」とはいうものの実に多様な製造方法があちらこちらに現れ、輸出を目的とする生産のため大混乱しながらも茶業界が異様な盛り上がりをみせるこの時期、その渦の中心にあった人の手元に茶の引札がのこされた。そのなかでまず注目したいのが、竹田紹清の二点である。



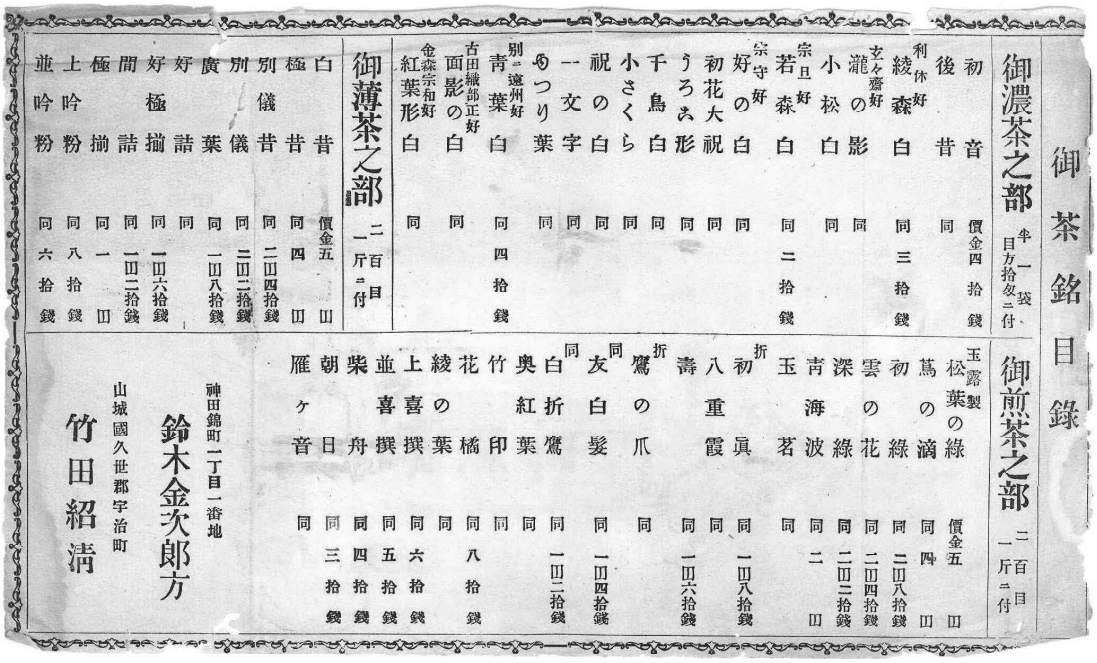
□資料17　竹田紹清引札①（個人蔵「上林牛加家文書」）

幕末期の松寿自身の日記によれば、茶の繁忙期にはまず竹田、そして元代官家の六郎家と隼人（竹庵）家の両上林の、それぞれ管理下にある茶園の「手伝い」で、製茶の季節はともかくも終わってしまう。

竹田紹清家と上林牛加家は、同じ元御袋茶師仲間であり、住まいも近くまた縁戚関係もあり、この時期の両家は密接な

御茶銘目録			
御濃茶之部 半壹袋二付			
初昔	価	金弐分	
後昔	同		
綾森白	同	金壱分弐朱	
瀧の影	同		
小松白	同		
若森白	同	金壱分	
初花大祝	同		
鱗形	同		
千鳥白	同		
小ざくら	価	金壱分	
祝ノ白	同		
一文字	同		
ゆづり葉	同		
外ニ 青葉白	同	金弐分	
面影白	同		
紅葉形白	同		
龍の影	同		
初音	同		
御薄茶之部			
白昔	価	金七両	
極昔	同	金五両	
別儀昔	同	金三両	
広葉	同	金弐両三分	
好詰	価	金弐両壱分	
好極揃	同	金弐両	
間詰	同	金壱両二分	
極揃	同	金壱両壱分	
吟粉	同	金壱両	
御煎茶之部			
初みどり	価	金四両	
雲の花	同	金三両弐分	
百々衡	同		
青海波	同		
玉茗	同	金三両	
初真	同		
八重霞	同		
深みどり	同		
寿	同	金弐両壱分	
鷹ノ爪	同	以上	
友白髪	価	金壱両三分	
白折鷹	同	金壱両二分	
奥紅葉	同		
竹印	同		
花橘	同	金壱両一分	
綾の葉	同		
上喜撰	同	金壱両	
喜選	同	金三分二朱	
雁金	同	金壱分二朱	
えり葉	同	以上	金二朱
洛巽宇治 竹田紹清（印影）			

□資料17　竹田紹清引札①



御茶銘目録

御濃茶之部　半一袋　目方拾匁ニ付

初音　價金四拾錢
後昔　同
利休好綾森白　同三拾錢
玄々齋好瀧の影　同
小松白　同
宗旦好若森白　同二拾錢
宗守好の白　同
初花大祝　同
うろこ形　同
千鳥白　同
小さくら　同
祝の白　同
一文字　同
ゆつり葉　同
別ニ遠州好青葉白　同四拾錢
古田織部正好面影の白　同
金森宗和好紅葉形白　同

御薄茶之部　二百目　一斤ニ付

白昔　價金五匁
極昔　同四匁
別儀昔　同二匁四拾錢
別儀　同二匁二拾錢
廣葉　同一匁八拾錢
好詰　同
好極揃　同一匁六拾錢
間詰　同一匁二拾錢
極揃　同一匁
上吟粉　同八拾錢
並吟粉　同六拾錢

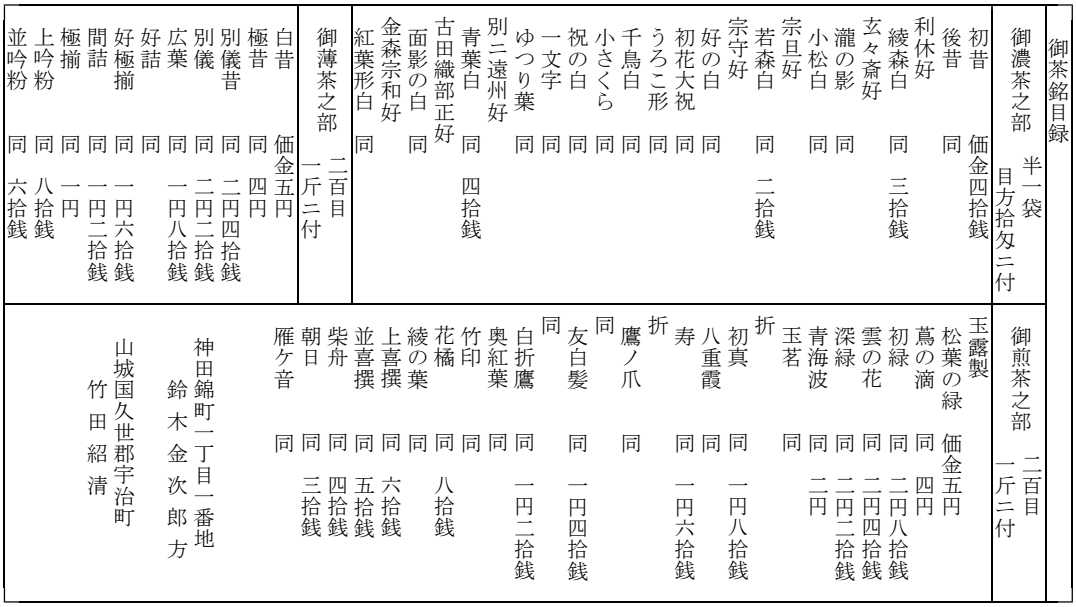
御煎茶之部　二百目　一斤ニ付

玉露製松葉の緑　價金五匁
蔦の滴　同四匁
初緑　同二匁八拾錢
雲の花　同二匁四拾錢
深緑　同二匁二拾錢
青海波　同二匁
玉茗　同
折初眞　同一匁八拾錢
八重霞　同
壽　同一匁六拾錢
折鷹の爪　同
友白髪　同一匁四拾錢
白折鷹　同一匁二拾錢
奥紅葉　同
竹印　同
花橘　同八拾錢
綾の葉　同六拾錢
上喜撰　同五拾錢
並喜撰　同四拾錢
柴舟　同三拾錢
朝日　同
雁ケ音　同

神田錦町一丁目一番地
鈴木金次郎方

山城國久世郡宇治町
竹田紹清

□資料18　竹田紹清引札②（個人蔵「上林牛加家文書」）



御茶銘目録

御濃茶之部　半一袋　目方拾匁ニ付

初昔　価金四拾錢
後昔　同
利休好綾森白　同三拾錢
玄々斎好瀧の影　同
小松白　同
宗旦好若森白　同二拾錢
宗守好の白　同
初花大祝　同
うろこ形　同
千鳥白　同
小さくら　同
祝の白　同
一文字　同
ゆつり葉　同
別ニ遠州好青葉白　同四拾錢
古田織部正好面影の白　同
金森宗和好紅葉形白　同

御薄茶之部　二百目　一斤ニ付

白昔　価金五円
極昔　同四円
別儀昔　同二円四拾錢
別儀　同二円二拾錢
広葉　同一円八拾錢
好詰　同
好極揃　同一円六拾錢
間詰　同一円二拾錢
極揃　同一円
上吟粉　同八拾錢
並吟粉　同六拾錢

御煎茶之部　二百目　一斤ニ付

玉露製松葉の緑　価金五円
蔦の滴　同四円
初緑　同二円八拾錢
雲の花　同二円四拾錢
深緑　同二円二拾錢
青海波　同二円
玉茗　同
折初真　同一円八拾錢
八重霞　同
壽　同一円六拾錢
折鷹ノ爪　同
友白髪　同一円四拾錢
白折鷹　同一円二拾錢
奥紅葉　同
竹印　同
花橘　同八拾錢
綾の葉　同六拾錢
上喜撰　同五拾錢
並喜撰　同四拾錢
柴舟　同三拾錢
朝日　同
雁ケ音　同

神田錦町一丁目一番地
鈴木金次郎方

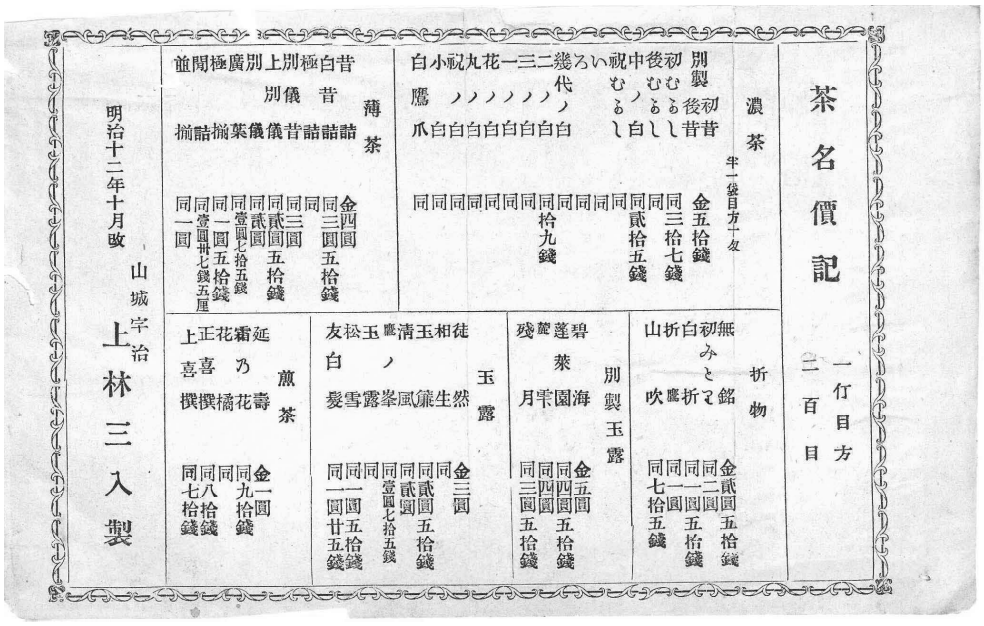
山城国久世郡宇治町
竹田紹清

□資料18　竹田紹清引札②

間柄であった。その竹田家は、茶道の家元千家、しかも三千家ともに深く結びついていた。また竹田は相当な面積の茶園を保有しており、松寿は直接的にはこの竹田の茶園の管理経営とそこでの製茶の経験から、それもおそらくは幼い頃から多くを学んだと考えられる。また彼は、精密な草花の写生図を多数のこしており、こと植物については天性の感性を持ち合わせていたことをうかがわせる。

さて、引札②（資料18）にあるように、竹田は東京神田錦町の鈴木金次郎のもとを拠点に営業をしていた。鈴木邸は、おそらく今でいうアンテナショップとビジネスホテルを兼ね合わせたような、そんな業態を営んでいたのではないか。東京での暮らしが始まってからも第一番目の連絡先であったし、同郷や関係者もしばしばここを訪れ、顔を付き合わせた交流の場であったようだ。ちなみに①（資料17）は明治初年、②も同時期ながら数年後、松寿の在京時と推定される。以下、松寿のコレクションのなかから年記を明らかにする宇治の茶商のものを順に四点あげる。

上林三入の引札（資料19）は、銀座に特約店があったために入手されたものと思われる。同じく旧御茶師家の長井（資料21）は、欄外に記される「旅宿日本橋伊勢町　河岸八番地河内屋甚蔵」を定宿としたことがわかる。竹田もそうであったように、宇治の茶商は出先の宿泊先を営業所として販売活動をした。松阪儀右衛門（資料20）の場合は、四日市在塩浜北組の今村伝五郎を取次とすることが明示されるだけで、この系列による東京での活動があったかどうかまではわからない。ただ、身分や立場がどのようであれ、宇治及びそ周辺から直接、間接的に江戸に出向いて独自に茶の販売に関わった人は相当数にのぼったことがおのずと推測できる。


茶名價記
一行目方二百目
濃茶
半一袋目方一匁
別製初昔　金五拾錢
初後昔　同三拾七錢
むるし　同貳拾五錢
後中むるし　同
中祝ノ白　同
祝ろい　同
幾代ノ白　同拾九錢
二幾　同
三二　同
一三　同
花一　同
九花　同
小九　同
祝小　同
白祝　同
昔白　同
薄茶
昔　金四圓
別儀昔　同三圓五拾錢
極別儀昔　同
上別儀昔　同貳圓五拾錢
廣極　同貳圓
閨廣　同壹圓七拾五錢
並閨　同一圓五拾錢
揃詰　同壹圓廿七錢五厘
揃詰　同一圓
鷹ノ瓜　同白
ノ白　同白
ノ白　同白
ノ白　同白
ノ白　同白
ノ白　同白
ノ白　同白
折物
無銘　金貳圓五拾錢
初みとゞ　同二圓
白折花　同一圓五拾錢
折鷹　同一圓
山吹　同七拾五錢
別製玉露
碧海　金五圓
蓬園　同四圓五拾錢
萊　同四圓
殘雪月　同三圓五拾錢
玉露
徒然　金三圓
相生　同
玉簾　同貳圓五拾錢
清風　同貳圓
鷹峯　同壹圓七拾五錢
玉露　同
松雪　同
ノ　同一圓五拾錢
友髮　同一圓廿五錢
煎茶
延壽　金一圓
霜花　同九拾錢
ノ橘　同
正花　同八拾錢
上撰　同
喜撰　同七拾錢
明治十二年十月改
山城宇治
上林三入製

□資料19　上林三入引札（個人蔵「上林牛加家文書」）

茶名価記　一斤目方二百目

濃茶　半一袋目方十匁
別製初昔　金五拾銭
後昔　同三拾七銭
初むかし　同
後むかし　同弐拾五銭
中ノ白　同
祝むかし　同
い　同
ろ　同
幾代ノ白　同拾九銭
二ノ白　同
三ノ白　同
一ノ白　同
花ノ白　同
丸ノ白　同
祝ノ白　同
小白　同
白鷹爪　同

薄茶
昔詰　金四円
白昔詰　同三円五拾銭
極詰　同
別儀昔　同三円
上別儀　同弐円五拾銭
別儀　同弐円
上別儀　同弐円五拾銭
極揃　同一円五拾銭
間詰　同壱円卅七銭五厘
並揃　同一円

折物
無銘　金弐円五拾銭
初みとり　同弐円
白折　同一円五拾銭
折鷹　同一円
山吹　同七拾五銭

別製玉露
碧海　金五円
蓬莱園　同四円五拾銭
麓雫　同四円
残月　同三円五拾銭

玉露
徒然　金三円
相生　同
玉簾　同二円五拾銭
清風　同二円
鷹ノ峯　同壱円七拾五銭
玉露　同
松雪　同一円五拾銭
友白髪　同一円廿五銭

煎茶
延寿　金一円
霜の花　同九拾銭
花橘　同
正喜撰　同八拾銭
上喜撰　同七拾銭

明治十二年十月改　山城宇治　上林三入製

□資料19　上林三入引札

御茶銘品目　壱斤目方弐百目

御濃茶　半袋目方
拾文目
初昔　金三拾銭
後昔　同
祝ノ白　金二十五銭
宇文字　同

御薄茶
極詰　金二円廿五銭
上別儀　金二円十銭
別儀　同二円
広葉　同一円五十銭
上間詰　同一円廿五銭
並間詰　同一円十銭
上極揃　同一円
極揃　同九十銭
上吟粉　同五十五銭
コノミ　同四十銭

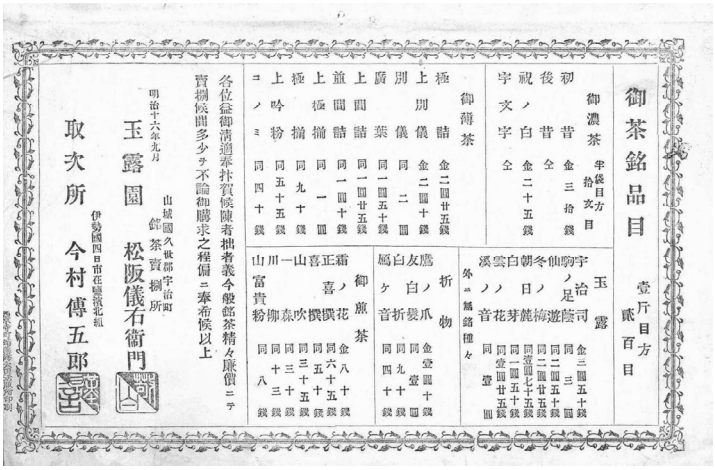
玉露
宇治司　金三円五十銭
駒ノ足蔭　同三円
仙遊　同二円五十銭
冬ノ梅　同二円廿五銭
朝日麓　同壱円七十五銭
白芽　同一円五十銭
雲ノ花　同壱円廿五銭
渓ノ音　同壱円
外ニ無銘種々

折物
鷹ノ詰　金壱円十銭
友白髪　同壱円
白折　同九十銭
雁ケ音　同四十銭

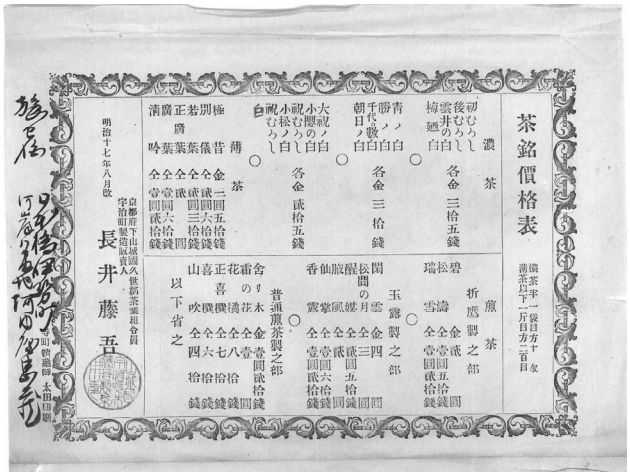
御煎茶
霜ノ花　金八十銭
正喜撰　同六十五銭
喜撰　同五十銭
山吹　同三十五銭
一森　同三十銭
川柳　同十三銭
山富貴粉　同八銭

各位益御清適奉拝賀候、陳者拙者義今般銘茶精々廉価ニテ売捌候間、多少ヲ不論御購求之程偏ニ奉希候、以上
明治十六年九月　山城国久世郡宇治町
銘茶売捌所
玉露園　松阪儀右衛門（印影）
伊勢国四日市在塩浜北組
取次所　今村伝五郎（印影）
西京寺町蛸薬師太田活版印刷所

□資料20　松阪儀右衛門引札



□資料20　松阪儀右衛門引札（個人蔵「上林牛加家文書」）



□資料21　長井藤吾引札（個人蔵「上林牛加家文書」）

茶銘価格表　濃茶半一袋目方十匁　薄茶以下一斤目方二百目

濃茶
初むかし　各金三拾五銭
後むかし
雲井の白
梅の白
○
青ノ白
勝ノ白　各金三拾銭
千代の数白
朝日ノ白
○
大祝ノ白
小桜の白
祝むかし
小松ノ白
祝むかし　各金弐拾五銭
白
○
薄茶
極昔　金三円五拾銭
別儀　同弐円六拾銭
若葉　同弐円三拾銭
正広葉　同弐円
広葉　同壱円六拾銭
清吟　同壱円弐拾銭

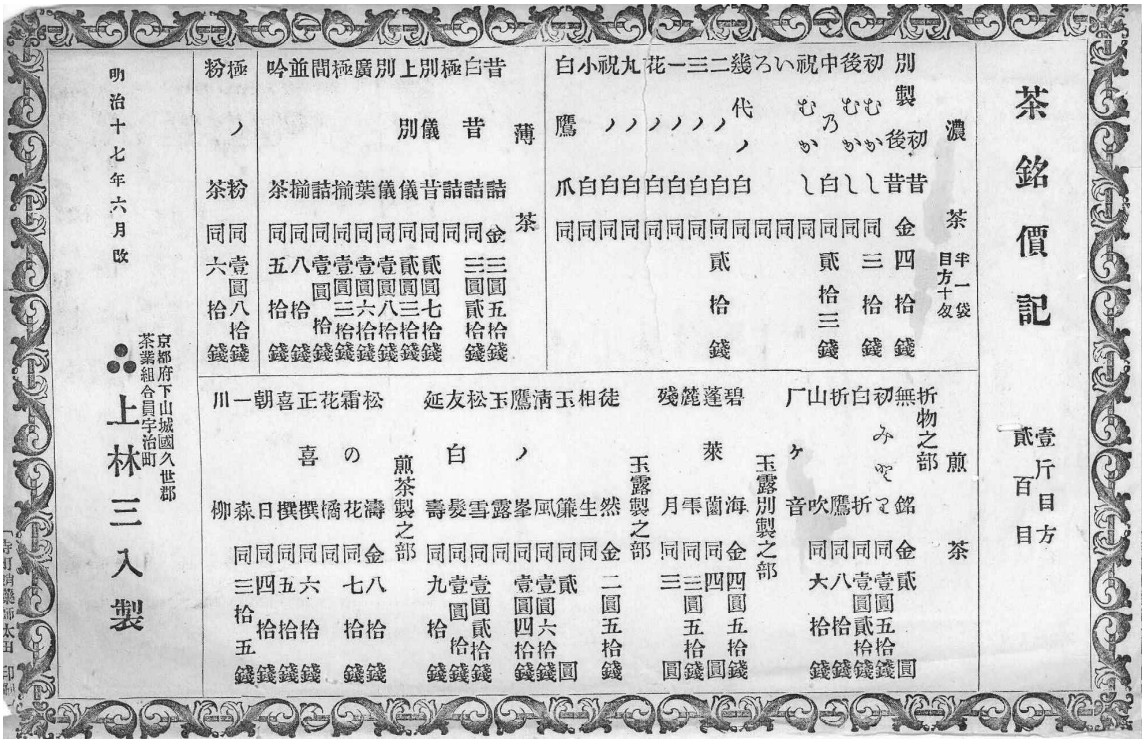
煎茶
折鷹製之部
碧　金弐円
松濤　同壱円五拾銭
瑞雪　同壱円弐拾銭
○
玉露製之部
閑雲　金四円
松間の月　同三円
醒媒　同弐円五拾銭
腋風　同弐円
仙掌　同壱円六拾銭
香露　同壱円弐拾銭
○
普通煎茶製之部
舎リ木　金壱円弐拾銭
霜の花　同壱円
花橘　同八拾銭
正喜撰　同七拾銭
喜撰　同六拾銭
山吹　同四拾銭

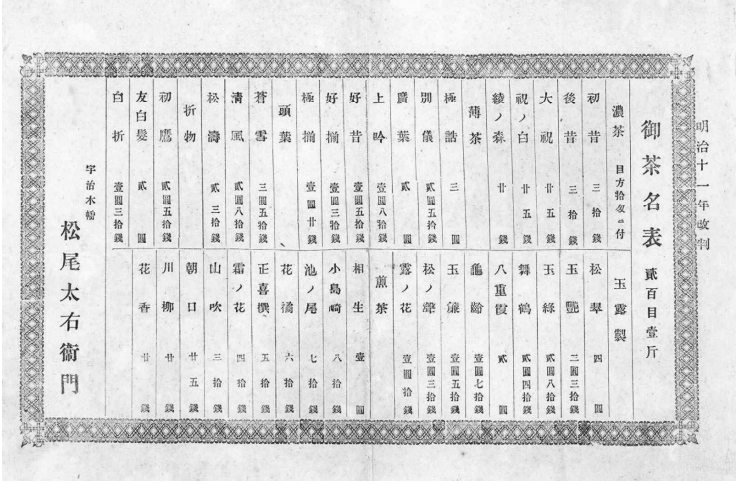
以下省之

京都府下山城国久世郡茶業組合員
宇治町製造販売人
長井藤吾（印）
明治十七年八月改
寺町蛸薬師　太田印刷

（後筆）
「旅宿　日本橋伊勢町
河岸八番地　河内屋忠蔵」

□資料21　長井藤吾引札


茶銘價記
壹斤目方
貳百目
濃茶
半一袋
目方十匁
別製
初昔
後昔
金四拾錢
初むかし
後むかし
中の白
祝むかし
いろ
祝
九
花
一
三
二
幾
ろ
祝
小
白
代ノ
白ノ
白ノ
白



□資料23　松尾太右衛門引札（収蔵資料№1407）

松寿が集めた引札に、館蔵の松尾太右衛門（木幡）を加えて、宇治関係茶商の価格を次表にまとめておく。

ところで、商品としての茶がどのように流通したのか、どんな仕組になっていたのか、それをうかがわせるわかりやすい事例に出会えていない。大坂では宇治田原の茶問屋が独自に活躍していることをしめす複数の引札に出くわしたが、大坂にしろ、京都にしろ、関西圏に江戸周辺で生産された茶が流通することはまず考えにくい。また大坂の店舗にしばしば登場した日向茶も、それは日向で生産された茶というよりも、大安売りや見切り品の代名詞といった印象が強く、ほぼそういう意味合いで通用した名称と見る方が妥当なように思える。

ただ、街中の一軒の小売店ではさほど多くの在庫をかかえ込むはずはない。だから、先にみた川崎喜兵衛（大坂⑨、資料15）の店舗のように、ざっと茶銘を並べるタイプは、すべての銘柄を常時準備するというのではなくて、その店が入荷

明治十一年改判

御茶名表　弐百目壹斤

濃茶	目方拾匁二付三拾錢	玉露製	四円
初昔	三拾錢	松翠	三円三拾錢
後昔	三拾錢	玉艶	三円八拾錢
大祝	廿五錢	玉緑	弐円四拾錢
祝ノ白	廿五錢	舞鶴	弐円
綾ノ森	廿錢	八重霞	壱円七拾錢
薄茶		亀齢	壱円五拾錢
極詰	三円	玉簾	壱円三拾錢
別儀	弐円五拾錢	松ノ声	壱円拾錢
広葉	弐円	露ノ花	壱円拾錢
上吟	壱円八拾錢	煎茶	
好昔	壱円五拾錢	相生	壱円
好揃	壱円三拾錢	小島崎	八拾錢
極揃	壱円廿錢	池ノ尾	七拾錢
頭葉		花橘	六拾錢
蒼雪	三円五拾錢	正喜撰	五拾錢
清風	弐円八拾錢	霜ノ花	四拾錢
松濤	弐三拾錢	山吹	三拾錢
折物		朝日	廿五錢
初鷹	弐円五拾錢	川柳	廿錢
友白髪	弐円	花香	廿錢
白折	壱円三拾錢		

宇治木幡　松尾太右衛門

□資料23　松尾太右衛門引札

種別	竹田紹清②	松尾太右衛門	上林三入	松阪儀右衛門	上林三入	長井藤吉
濃茶	濃茶 20銭～40銭	濃茶 20銭～30銭	19銭～50銭	濃茶 25銭～30銭	20銭～40銭	濃茶 25銭～35銭
薄茶	薄茶 60銭～5円	薄茶 1円20銭～3円	1円～4円	薄茶 40銭～2円25銭	50銭～3円50銭	薄茶 1円20銭～3円50銭
折物	1円20銭 ～1円80銭	頭葉 2円30銭 ～3円50銭 折物 1円30銭 ～2円50銭	75銭～2円50銭	40銭～1円10銭	60銭～2円	折鷹製 1円20銭～2円
煎茶	30銭～1円60銭	20銭～1円	70銭～1円	8銭～80銭	35銭～80銭	普通煎茶製 40銭～1円20銭
玉露	2円～5円	玉露製 1円10銭～4円	玉露別製 3円50銭～5円 玉露製 1円25銭～3円	1円～3円50銭	玉露別製 3円～4円50銭 玉露製 90銭～2円50銭	玉露製 1円20銭～4円

■宇治の茶価比較表

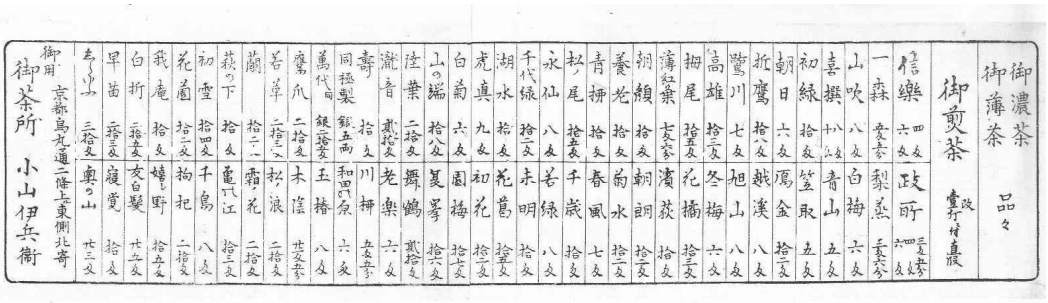
できる最大限の一覧を示すものといった理解でよいのではないか。実はそうした傾向と事情を推察させる事例は、京都市中の店舗に多く見受けられる。そのもっとも端的な一例が、値段の高下も関係なく単純に茶銘を並べる、次の小山伊兵衛の店舗の場合である。

京都　小山伊兵衛

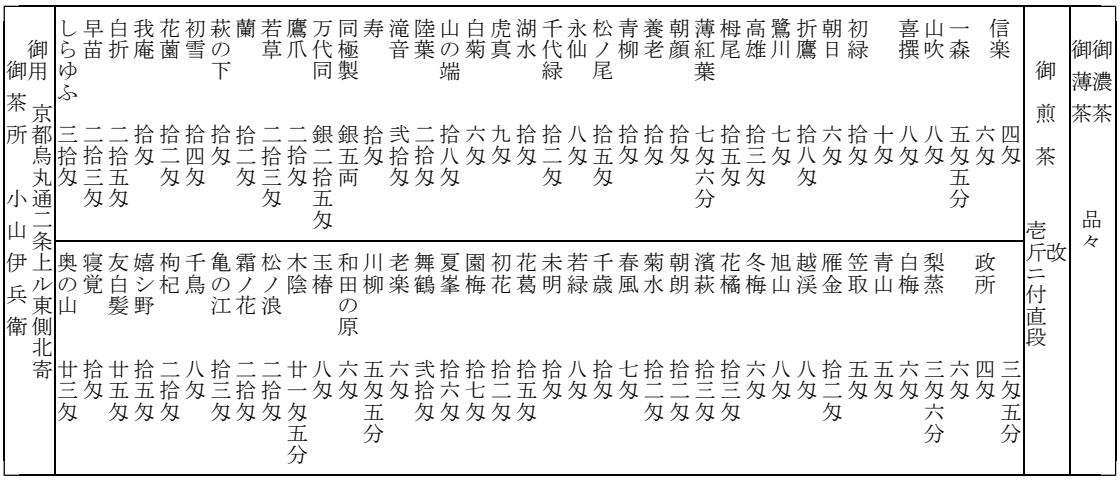
濃茶と薄茶の銘柄を「品々」と省略しながら、「御煎茶」にはなんと七〇を超える茶銘を列記する。煎茶についていかに充実した品揃えを誇る店なのか、それを宣伝することが目的と思われる。館蔵品ではないが、濃茶・薄茶の詳細を記したものや、一部の煎茶銘だけで構成される同店の別の引札も確認している（共栄製茶蔵）。同じ店でも価格表を使い分ける、もちろん現在もあたりまえに行われていることだが、それがすでに江戸時代にあったわけだ。

この種の引札も様式としては画一的で同質なのだが、地域や店によってそれぞれの事情を反映した体裁を示したことがわかる。だが、もともと商品として扱われる茶は、宇治を起点とするスタイルがベースにあったこともうかがえる。すなわち濃茶・薄茶のセットと「煎茶」、この大きく二手に分類して表記されることが前提として認識されていたのは明らかである。前掲の竹田の例はまさに標準的な一つととらえてよいと思う。

小山伊兵衛の値段表に、濃茶・薄茶煎茶という部類の別はない。茶銘を価格ごとに並べ替え、それに属するであろうと



□資料24　小山伊兵衛引札（収蔵資料№.1672）



御濃茶 御薄茶 品々	御煎茶 壱斤付直段 改	信楽	四匁	
		一森	六匁	
		山吹	五匁五分	
		喜撰	八匁	
		初緑	十匁	
		朝日	六匁	
		折鷹	拾匁	
		鷺川	七匁	
		高雄	拾八匁	
		梅尾	拾三匁	
		薄紅葉	拾五匁	
		梅顔	七匁六分	
		養老	拾匁	
		朝顔	拾匁	
		青柳	拾匁	
		松ノ尾	拾五匁	
		永仙	八匁	
		千代緑	拾匁	
		湖水	拾匁	
		虎真	九匁	
		白菊	六匁	
		山の端	拾八匁	
		陸葉	二拾匁	
		瀧音	弐拾匁	
		壽	拾匁	
		同極製	銀二拾五匁	
		萬代同	二拾匁	
		鷹爪	二拾三匁	
		若草	拾二匁	
		蘭	拾匁	
		萩の下	拾匁	
		初雪	拾四匁	
		花菌	拾二匁	
		我庵	拾匁	
		白折	二拾五匁	
		早苗	二拾三匁	
		奥の山	三拾匁	
		政所	四匁	三匁五分
		梨蒸	三匁六分	
		白梅	六匁	
		青山	五匁	
		笠取	五匁	
		雁金	拾二匁	
		越渓	八匁	
		旭山	八匁	
		冬梅	六匁	
		花橘	拾三匁	
		濱萩	拾三匁	
		朝朗	拾二匁	
		菊水	拾二匁	
		春風	七匁	
		千歳	拾匁	
		若緑	八匁	
		未明	拾匁	
		花葛	拾五匁	
		初花	拾二匁	
		園梅	拾七匁	
		夏峯	拾六匁	
		舞鶴	弐拾匁	
		老楽	六匁	
		川柳	五匁五分	
		和田の原	六匁	
		玉椿	八匁	
		木陰	廿一匁五分	
		松ノ浪	二拾匁	
		霜ノ花	二拾匁	
		亀の江	拾三匁	
		千鳥	八匁	
		枸杞	二拾匁	
		嬉シ野	拾五匁	
		友白髪	廿五匁	
		寝覚	拾匁	
		奥の山	廿三匁	
		しらゆふ	三拾匁	
		御用 京都烏丸通二条上ル東側北寄 御茶所 小山伊兵衛		

□資料24　小山伊兵衛引札

価格	茶　銘	価格	茶　銘
3匁5分	政所①	12匁	千代緑・蘭・花菌・雁金・朝朗・菊水・初花
3匁6分	梨蒸		
4匁	信楽①・政所②	13匁	高雄・花橘・亀の江
5匁	青山・笠取	14匁	初雪
5匁5分	一森・川柳	15匁	梅尾・花葛・松ノ尾・嬉シ野
6匁	信楽②・朝日・白菊・政所③・白梅・冬梅・老楽・和田の原	16匁	夏峯
		17匁	園梅
7匁	鷺川・春風	18匁	折鷹・山の端
7匁6分	薄紅葉	20匁	陸葉・瀧音・鷹爪・舞鶴・松ノ浪・霜ノ花・枸杞
8匁	山吹・喜撰・永仙・越渓・旭山・若緑・玉椿・千鳥		
		21匁5分	寿極製・木陰
9匁	虎真	23匁	若草・早苗・奥の山
10匁	喜撰・初緑・朝顔・養老・青柳・湖水・寿・萩の下・我庵・浜萩・千歳・未明・寝覚	25匁	万代極製・白折・友白髪
		30匁	しらゆう

■小山伊兵衛の茶価（価格順）

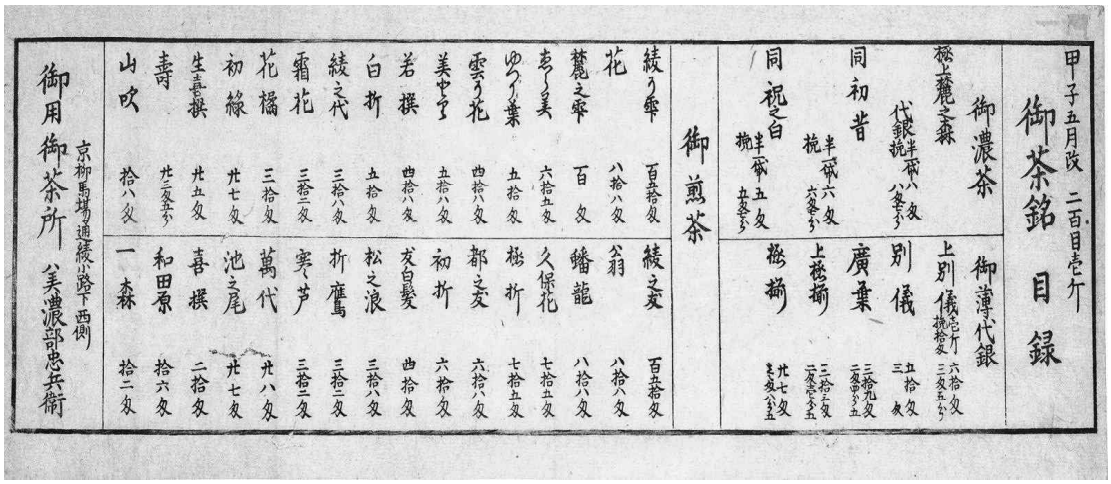
推測される、江戸や大坂でみたのと同様の茶銘を下線で示してみた。小山の顧客たちには茶銘だけでその種別が理解できたと思われる。

京都　美濃屋忠兵衛

明治一〇年代の宇治の茶商たちの価格表に話を戻すと、これらは上下二段の比較的そろった様式となっている。竹田や三入の事例が下敷きになったことはおおよそ見当がつく。このように見かけがそろうのは、扱う商品の質もほぼ均一とみて間違いないと思う。先にあげた四例のうち上林三入が二点、ともに煎茶の先頭は、「折物」を置く。長井はそれを「折鷹製」とし、松尾の表に「頭葉」として顔をのぞかせるのはおそらく葉物つまり煎茶飲用のための碾茶葉の呼称である。

とりわけ三入は玉露に「別製」を設けるが、さてこの時期の玉露の「別製」とはいったい何を、どんな品質や体裁をさすものなのか、これだけでは判断することはできない。ただ、この「別製」がかえって値を下げていることと、全般的に価格がほぼ横ばいで、全体としていかにもじり貧状態にある、そんな印象を漂わせるのが気にかかる。実際に変化は起きていた。京都市中でもトップクラス、柳馬場通綾小路下ル西側の美濃部忠兵衛茶舗をのぞいてみることにしよう。

美濃部忠兵衛引札四点のうちの③が上林松寿のコレクション、ほかは本館蔵である。まず表題を「御茶銘目録」とする①の甲子、②の己巳はそれぞれ元治元年（一八六四）と明治二年（一八六九）で、一斤を二〇〇匁とする価格である。


甲子五月改　二百目壱斤
御茶銘目録
御濃茶　御薄代銀
極上麓之森　代銀半銭八匁
上別儀壱斤　六拾匁
桃拾匁　三匁五分
同初昔　桃　半銭六匁　六匁三分
別儀　五拾匁　三匁
廣葉　三拾九匁　三匁四分五厘
同祝之白　桃　半銭五匁　五匁三分
上松嶺　三拾七匁　三匁七分五厘
松嶺　廿七匁　三匁八分五厘
御煎茶
綾う雫　百五拾匁
花　八拾八匁
麓之雫　百匁
ちゝ美　六拾五匁
ゆゝ葉　五拾匁
雲う花　四拾八匁
美ゝ子　五拾八匁
若撰　四拾八匁
白折　五拾匁
綾之代　三拾八匁
霜花　三拾二匁
花橘　三拾匁
初緑　廿七匁
生喜撰　廿五匁
寿　廿三匁五分
山吹　拾八匁
綾之麦　百五拾匁
谷羽　八拾八匁
繙龍　八拾八匁
久保花　七拾五匁
松折　七拾五匁
都之麦　六拾八匁
初折　六拾匁
麦白髪　四拾匁
松之浪　三拾八匁
折鷹　三拾二匁
寒芦　三拾二匁
萬代　廿八匁
池之尾　廿七匁
喜撰　二拾匁
和田原　拾六匁
一森　拾二匁
京柳馬場通綾小路下西側
御用御茶所　美濃部忠兵衛

□資料25　美濃部忠兵衛引札①（収蔵資料№199-1）

③・④は、①・②が和紙に木版印刷であったのに対し、洋紙に活版印刷となる。表題も「御茶銘録並価表」とかわり、一斤＝一六〇匁で通貨は円となる。③は東京上野の有助軒を売捌所とするもので、明治一〇年代半ばあたりのちょうど資料が少ない時期を埋めてくれる。ちなみに④は明治三〇年頃と踏んでいる。

甲子五月改　二百目壱斤
御茶銘目録

御濃茶		御薄代銀	
極上麓之森	代銀半一袋八匁	上別儀	壱斤　六拾匁
	挽　八匁七分	別儀	挽拾匁三匁五分
同　初昔	半一袋六匁	広葉	五拾匁
	挽　六匁七分		三匁
同　祝之白	半一袋五匁	上極揃	三拾九匁
	挽　五匁七分		二匁四分五
			三拾五匁
			二匁壱分五
			廿七匁
			壱匁八分五

御煎茶			
綾か雫	百五拾匁	綾之友	百五拾匁
花	八拾八匁	翁	八拾八匁
麓之雫	百匁	蟠龍	八拾八匁
えらみ	六拾五匁	久保花	七拾五匁
ゆつり葉	五拾匁	極折	七拾五匁
雲か花	四拾八匁	都之友	六拾八匁
みとり	五拾八匁	初折	六拾匁
若撰	四拾八匁	友白髪	四拾匁
白折	五拾匁	松之浪	三拾八匁
綾之代	三拾八匁	折鷹	三拾二匁
霜花	三拾二匁	寒芦	三拾二匁
花橘	三拾匁	万代	廿八匁
初緑	廿七匁	池之尾	廿七匁
生喜撰	廿五匁	喜撰	二拾匁
寿	廿三匁五分	和田原	拾六匁
山吹	拾八匁	一森	拾二匁

御用御茶所　美濃部忠兵衛
京柳馬場通綾小路下西側

□資料25　美濃部忠兵衛引札①

□資料26　美濃部忠兵衛引札②（収蔵資料No.199-2）

□資料27　美濃部忠兵衛引札③（個人蔵「上林牛加家文書」）

己巳七月改　二百目壱斤
御茶銘目録

御濃茶
極上麓之森　半一袋ニ付　代金　百廿五疋
同　初昔　同　百疋
同　祝之白　同　七拾五疋

御薄代金　壱斤ニ付
上別儀　壱両三歩
別儀　壱両二歩
広葉　壱両
上極揃　三歩二朱
極揃　三歩
但シ挽料半斤ニ付金二朱

御煎茶　別品　福寿海　金五両

鳳龍　四両
綾の雫　三両二歩
花　二両一分
麓之雫　二両三歩
えらみ　二両
綾鷹　一両三分二朱
みとり　同
雲の花　壱両三分
若撰　同
白折　同
綾之代　壱両一分二朱
霜花　壱両二朱
花橘　壱両
生喜撰　三分二朱
寿　三歩一朱
山吹　二歩二朱

綾之友　三両二分
翁　三両
蟠龍　二両二歩
玉露　二両一分
久保花　同
極折　同
都之友　二両
初折　同
友白髪　壱両二分二朱
松之浪　壱両二歩
折鷹　壱両一分二朱
寒芦　同
池之尾　三分三朱
喜撰　三歩
山葛　二歩三朱
一森　壱分二朱

御用御茶所　美濃部忠兵衛
京柳馬場通綾小路下西側

□資料26　美濃部忠兵衛引札②

①・②はこれまで見てきたここで言う宇治・京都型引札の典型的な組み方で、濃茶・薄茶と煎茶の二区分となっている。しかし③になると、煎茶の部分が玉製・葉物・折物・煎茶に細分化される。

そして④では、玉製から福寿海が飛び出して、そのまた上位に金亀露という茶銘が新たに登場し、その二者だけでもっ

御茶銘録並価表　但壱斤百六十目

御濃茶
極上　目方十匁ニ付
梅之白　四十銭
麓之森　三十五銭
初昔　三十銭
綾之森　弐十五銭
祝之白　弐十銭

玉製
福寿海　四円五十銭
鳳龍　三円五十銭
綾之友　三円
蟠龍　二円五十銭
白鶴　二円
玉露　壱円八十銭
都之友　壱円六十銭
綾鷹　壱円五十銭
雲之花　壱円三十銭
綾之代　壱円二十銭
玉塵　壱円

御薄茶
極昔　三円
極詰　弐円五十銭
上別儀　弐円
別儀　壱円五十銭
広葉　壱円三十銭
上極揃　壱円
極揃　八十銭

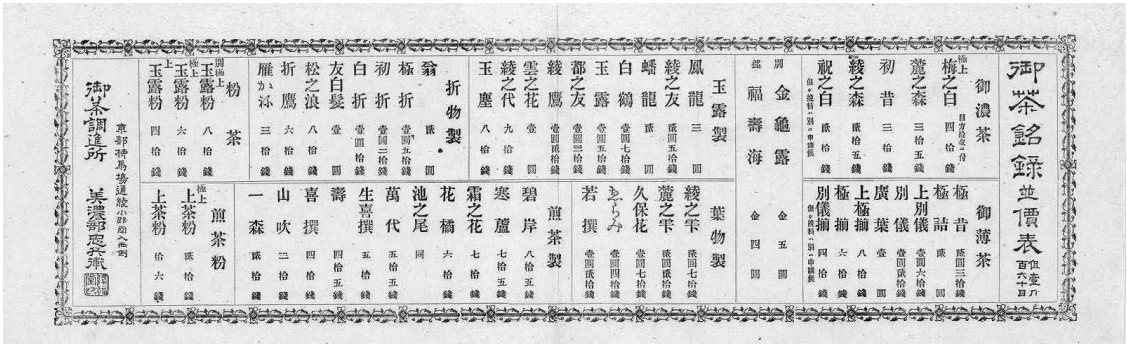
葉物
綾之雫　三円
麓之雫　弐円五十銭
久保花　弐円
えらみ　壱円七十銭
若撰　壱円五十銭

煎茶
碧岸　壱円二十銭
寒蘆　壱円十銭
霜之花　壱円
花橘　九十銭
池之尾　同
万代　八十五銭
生喜撰　八十銭
寿　七十五銭
喜撰　七十銭
山吹　六十銭
信楽　五十銭
一森　三十五銭

折物
翁　二円五十銭
極折　二円
初折　壱円六十銭
白折　壱円三十銭
友白髪　壱円二十銭
松之浪　壱円十銭
折鷹　九十銭
雁かね　五十銭

御茶調進所
京都柳馬場綾小路南入西側
本店　美濃部忠兵衛（印影）
東京上野広小路町十一番地
売捌所　有助軒（印影）

□資料27　美濃部忠兵衛引札③



□資料28　美濃部忠兵衛引札④（収蔵資料№189-2）

御茶銘録並価表　但壱斤百六十目

御濃茶
極上　目方拾匁ニ付
梅之白　四拾銭
蘆之森　三拾五銭
初音　三拾銭
綾之森　弐拾五銭
祝之白　弐拾銭
但シ挽料ハ別ニ申請候

別　金亀露　金五円
銘　福寿海　金四円

玉露製
鳳龍　三円
綾之友　弐円五拾銭
蟠龍　弐円
白鶴　壱円七拾銭
玉露　壱円五拾銭
都之友　壱円三拾銭
綾鷹　壱円弐拾銭
雲之花　壱円
綾之代　九拾銭
玉塵　八拾銭

折物製
翁　弐円
極折　壱円五拾銭
初折　壱円三拾銭
白折　壱円拾銭
友白髪　壱円
松之波　八拾銭
折鷹　六拾銭
雁かね　三拾銭

粉茶
別極上　玉露粉　八拾銭
極上　玉露粉　六拾銭
上　玉露粉　四拾銭

京都柳馬場通綾小路南入西側
御茶調進所　美濃部忠兵衛（印影）

御薄茶
極昔　弐円三拾銭
極詰　弐円
上別儀　壱円六拾銭
別儀　壱円弐拾銭
広葉　壱円
上極揃　八拾銭
極揃　六拾銭
別儀揃　四拾銭
但シ挽料ハ別ニ申請候

葉物製
綾之雫　弐円七拾銭
蘆之雫　弐円弐拾銭
久保花　壱円七拾銭
えらみ　壱円四拾銭
若撰　壱円弐拾銭

煎茶製
碧岸　八拾五銭
寒蘆　七拾五銭
霜之花　七拾銭
花橘　六拾銭
池之尾　同
萬代　五拾五銭
生喜撰　五拾銭
寿撰　四拾五銭
山吹　四拾銭
一森　三拾銭
弐拾銭

煎茶粉
極上　上茶粉　弐拾銭
上茶粉　拾六銭

□資料28　美濃部忠兵衛引札④

て「別銘」の枠が設けられ、③で細分化された四種類も玉露製、葉物製、折物製、煎茶製と名称を改める。

④に示された玉露・葉物・折物・煎茶の内訳について、①～③の価格表と照合すると、同様の茶銘が確認できる（次表）。

④で煎茶製とされるものは、はじめから下位にあって、ほぼそのままに移行したことがわかる。玉露・葉物・折物は、①・②では、一見順不同にならぶ印象を受けるが、もともと④に示されたような種類の別があって、顧客との間ではそれがほぼ自明のものとされていた、そのようにみてよいと思う。

それが明確に分別されるようになったのは、煎茶の最高級品として玉露の地位が確立してきたため。つまり美濃部の店ではこの三〇年ほどの間に、たとえば有力な安定した仕入れ先が開拓され、玉製そして玉露製の部門が確立されたということになるのだろう。その結果、従来から煎茶の上位を占め、常連客にはそれぞれの銘でもって、種別とランクが了解されていた葉物と折物の両者も明確に区別されることになり、最下位グループが「煎茶製」と称するようになる。美濃部の引札四点に見られる変化は、こう説明してほぼ間違いないと思われる。煎茶法に

①			②			③			④		
茶種	茶銘	価格（匁）	茶種	茶銘	価格（両）	茶種	茶銘	価格（円）	茶種	茶銘	価格（円）
御煎茶	○綾か雫	150	御煎茶	◎別品福寿海	5	玉製	◎福寿海	4.5	別銘	◎金亀露	5
	◎綾之友	150		◎鳳龍	4		◎鳳龍	3.5		◎福寿海	4
	○麓之雫	100		◎綾之友	3.2		◎綾之友	3	玉露製	◎鳳龍	3
	花	88		○綾之雫	3.2		◎蟠龍	3.5		◎綾之友	2.5
	●翁	88		●翁	3		◎白鶴	2		◎蟠龍	2
	◎蟠龍	88		○麓の雫	2.3		◎玉露	1.8		◎白鶴	1.7
	○久保花	75		◎蟠龍	2.2		◎都之友	1.6		◎玉露	1.5
	●極折	75		花	2.1		◎綾鷹	1.5		◎都之友	1.3
	◎都之友	68		◎玉露	2.1		◎雪之花	1.3		◎綾鷹	1.2
	○えらみ	65		○久保花	2.1		◎綾之代	1.2		◎雪之花	1
	●初折	60		●極折	2.1		◎玉塵	1		◎綾之代	0.9
	みとり	58		○えらみ	2	葉物	○綾之雫	3		◎玉塵	0.8
	ゆつり葉	50		◎都之友	2		○麓之雫	2.5	葉物製	○綾之雫	2.7
	●白折	50		●初折	2		○久保花	2		○綾之雫	2.2
	◎雪か花	48		◎綾鷹	1.32		○えらみ	1.7		○久保花	1.7
	○若撰	48		みとり	1.32		○若撰	1.5		○えらみ	1.4
	●友白髪	40		◎雪之花	1.3	折物	●翁	2.5		○若撰	1.2
	●松之浪	38		○若撰	1.3		●極折	2	折物製	●翁	2
	◎綾之代	38		●白折	1.3		●初折	1.6		●極折	1.5
	●折鷹	38		●友白髪	1.22		●白折	1.3		●初折	1.3
	●霜花	32		●松之浪	1.2		●友白髪	1.3		●白折	1.1
	●寒芦	32		◎綾之代	1.12		●松之浪	1.1		●友白髪	1
	●花橘	30		●折鷹	1.12		●折鷹	9.9		●松之浪	0.8
	●萬代	28		●寒芦	1.12		●雁かね	0.5		●折鷹	0.6
	初緑	27		●霜花	1.12	煎茶	●碧岸	1.2		●雁かね	0.3
	●池之尾	27		●花橘	1		●寒芦	1.1	煎茶製	●碧岸	0.85
	●生喜撰	25		●池之尾	0.33		●霜之花	1		●寒芦	0.75
	●寿	23.5		●生喜撰	0.32		●花橘	0.9		●霜之花	0.7
	●喜撰	20		●寿	0.31		●池之尾	0.9		●花橘	0.6
	●山吹	18		●喜撰	0.3		●萬代	0.85		●池之尾	0.6
	和田原	16		山鳥	0.23		●生喜撰	0.8		●萬代	0.55
	一森	12		●山吹	0.22		●寿	0.75		●生喜撰	0.5
				一森	0.12		●喜撰	0.7		●寿	0.45
							●山吹	0.6		●喜撰	0.4
							信楽	0.5		●山吹	0.3
							一森	0.35			

■美濃部忠兵衛の茶種・茶銘の変遷

◎：玉露　○：葉物　●：折物　●：煎茶

よって喫するすべての茶種をトータルに煎茶とすること、そのもっとも下位の一群をいわば狭義の煎茶として理解する、こうした二つの煎茶の捉え方が成立していたことがわかる。ある意味、今日にも通用する見方である。

①に示された価格にあきらかなように、葉物の最高級品がもともと煎茶群のトップで、それに玉露あるいはその前身となる商品が続いていた。それはつまり、玉露の発生にはそれと先行あるいは並行する葉物、折物への強い嗜好があったことの裏付けでもある。

碾茶園で丁寧に育成された茶葉が、上手な焙炉師の手により最後まで揉み切りによって仕上げられれば、上品な味わいの煎茶になったらしい。つまり、幕末の宇治周辺の各地で同時多発的にその発祥の伝承をもつ玉露とは、碾茶葉を焙炉の上で、最初から最後まで両手で茶葉を揉み続ける作業でもって乾燥されたものだったと考えられる。②で別品としてあらわれる福寿海も、そして③に「玉製」として列記される商品も当然そうした製法を基本として製造されたものをいったはずである。そうした点をとくに意識して③・④を種別ごとに比較しよう。

まずは碾茶である濃茶・薄茶から。濃茶の値段に変化は見られない。薄茶は最高位の三円が二円三〇銭に、最下位は八〇銭から四〇銭に下がっている。濃茶は、需要の大部分を占めた武家や寺院社会が維新期の変革により大きな影響をうけたため全般に需要が落ち込み、価格の伸びを抑えたものと思われる。いっぽう薄茶がやや低価格化したのは、一般に普及しはじめた茶道のお稽古の現場への供給量の増加がその背景にあるのかもしれない。が、むしろ次の玉露との関連、碾茶園の玉露園化による影響、生産量も品質もそれによってやや低下したといったことも理由のひとつかもしれない。さて問題はその玉製と玉露製である。

③の玉製の先頭にあった福寿海は④では「別銘」に格上げされるものの四円五〇銭から四円へ、鳳龍以下の諸銘も五〇銭から二〇銭の幅で全般に値を下げる。ただ、「別銘」の先頭に新銘柄の金亀露がいきなり五円の高額で前面に踊りでている。そしてこの「玉製」から「玉露製」への変化には、たんに表記の違いでは済まされない内容が含まれていた。

＊

それまで主流であった長時間の揉み切りの作業に替えて、葉の乾燥を強い力でもってする方式、「コクリ」や「デングリ」と呼ばれる葉をまとめて絞り込むようにして揉み込む作業が中心となり、仕上げの方法も直線的な形状を確保することのできる板擦りを最終の工程に導入する、まさに今日もその最上の姿とされる茶葉が針状の仕上がりとなる製茶法が、明治半ば頃に従来の揉み切り法にとってかわるとされる。③・④の時期に、相当なレベルにまでそれが達した証しとみてよいのではなかろうか。

その大きな要因は、通常の煎茶、美濃部の価格表で最下位を占めるジャンルの茶の製造が、全国的に普及したことに端を発している。もちろん輸出品としての製造で、それがまたきわめて急激で、その技術の向上も経費を抑えながら、同時

に省力化させることを目標に掲げた。また当時の茶の出来栄えの判断が、圧倒的に見かけ重視の立場をとったことから、本来の宇治製の特徴である揉み切り製の葉が丸く縮れたような仕上がりは嫌われ、まっすぐに細く伸びた形状の姿がよしとされた。まさに今日でいう玉露の形状そのもので、こうした考えが大勢を占めるようになっていったという経緯がある。

葉物から派生した宇治本来の揉み切りによる製法は、ピンと伸びて細い容姿を重視する市場の論理に押されて、その丸みを帯びた形状とともに、比較的短い時間で遠ざけられてしまった、そんなふうに推測できる。玉製から玉露製へ、美濃部の③から④への変化は、そうした形状の主流の変化を含み込まれていると考えざるをえない。

残る他の種類の茶についてもざっとみておく。

葉物は、全銘柄すべて三〇銭の値下がりである。濃茶・薄茶の価格が、横ばいから下降の傾向を示し、玉露の需要が比較的堅調なようだから、葉物の需要減による価格の下落もやむなしといったところだろうか。

折物は五〇銭から二〇銭と葉物よりも下落幅の方が大きい。これも玉露への嗜好の流れからくるものか。煎茶も、値幅は三五銭から一五銭とやや少ないが、価格の下落傾向は同じである。

④の末尾にある「粉茶」と「煎茶粉」、もちろんこれも出物である。とくに上段の三つのランクに分けられたもっとも上位の商品はその最下位と同額である。あらためて玉露というジャンルが完全に独立したという印象を強く受ける。ということは、玉露の茶葉以外の茎の部分なども出物として扱われていることが予想される。が、それが単独ではここにはあらわれない。おそらく、それらは上の「折物製」に吸収されていると考えられる。表の見かけ上はほぼ変わっていないが、「折物製」の内実は大きく変化していることが想像される。

木幡　松尾清之丞

美濃部では、玉製が玉露製に置き換えらていれたが、両者が並列されることもあった。明治二〇年代後半から三〇年代前半にかけて、宇治でそうした事例が確認できる。一つは木幡村の東松尾である。木幡村で製茶業を盛んに営んだ松尾一統各家は、それぞれに松尾姓を名乗るとともに、北松尾、東松尾のように苗字に一字を冠して屋号のように区別し合っていた。

東松尾家の当主松尾清之丞は、明治一二年（一八七九）、横浜で開催された製茶共進会に煎茶を出品するが、年齢は満一〇歳、栄えある一等賞に輝くのはそれから四年後、奈良博覧会でのことだった。もちろん、ベテランの従事者たちが脇を固めていたはずだが、蒸しの工程で革命的な成果をもたらした深底のセキレイ釜も、清之丞を中心にした考案・開発されたと伝える。そんな清之丞が農商務省からの依頼で優秀な技術者を全国に派遣し茶業の普及に努めるとともに、宮内省からは赤坂御苑での茶製造を委嘱されるのが、ちょうどこの引札の年代だった。上林松寿についで、およそ一世代遅れて現

東松尾茶館

松尾製茶

（商標）

登録商標

自園精製品

精製茶銘価録　壱斤量目　弐百匁定

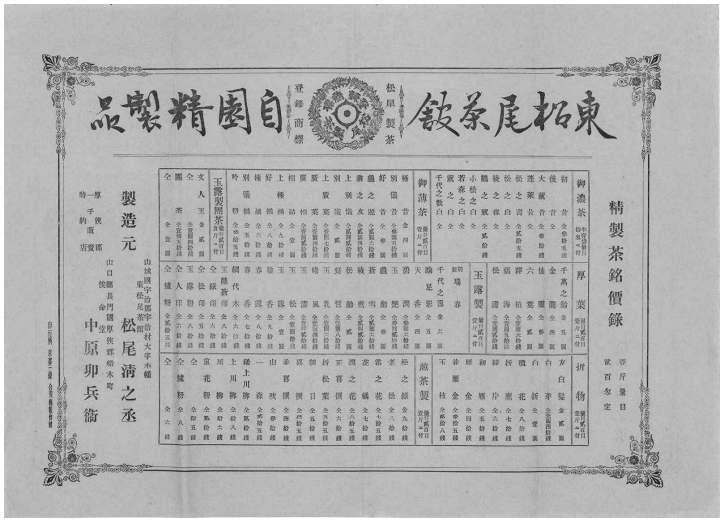
御濃茶	半壱袋量目 拾匁ニ付	
初昔	金参拾五銭	
後昔	同	
大祝昔	同参拾銭	
蓬莱昔	同	
松之寿	同弐拾五銭	
松之白	同	
綾之森	同弐拾銭	
鶴之祝	同	
小松之白	同	
若森之白	同	
祝之白	同	
千代之数白	量目弐百目 壱斤ニ付	
御薄茶		
極昔	金四円	
別儀昔	同参円五拾銭	
好昔	同参円	
亀之遊	同弐円六拾銭	
翁之友	同弐円四拾銭	
別儀儀	同弐円弐拾銭	
上広葉	同壱円七拾銭	
広葉	同壱円四拾銭	
広相	同壱円弐拾銭	
上相詰	同壱円	
極揃	同九拾銭	
好揃	同八拾銭	
極揃	同六拾銭	
別儀揃	同五拾銭	
吟粉	同参拾五銭	
玉露製団茶	量目弐百目 壱斤ニ付	
文人玉	金弐円	
同	同壱円四拾銭	
団茶	同壱円五拾銭	
同	同壱円	
厚葉	量目弐百目 壱斤ニ付	
千万之齢	金五円	
金龍	同四円	
仙霊	同参円	
六葉	同弐円	
群柏	同壱円六拾銭	
福海	同壱円五拾銭	
松濤	同壱円弐拾銭	
玉露製	量目一百目 壱斤ニ付	
別瑞春		
千代之寿	金六円	
駒足影	同五円	
天香	同四円	
碧澗	同参円六拾銭	
玉艶	同参円弐拾銭	
亀齢	同参円	
蒼雪	同弐円六拾銭	
綾鷹	同弐円弐拾銭	
松齢	同壱円八拾銭	
琵琶	同壱円	
玉乳	同壱円六拾銭	
清風	同壱円四拾銭	
玉濤	同壱円弐拾銭	
玉松	同壱円	
玉露	同九拾銭	
喰香	同八拾銭	
春露	同七拾銭	
春香	同六拾銭	
網代木	同六拾銭	
玉麓蒼印	同六拾銭	
玉露印	同五拾銭	
同松印	同八拾銭	
玉露粉	同六拾銭	
同人印	同弐拾五銭	
同炉粉	同弐拾五銭	
折物	量目弐百目 壱斤ニ付	
友白髪	金弐円	
白芽	同壱円四拾銭	
白折	同壱円	
瓊花	同八拾銭	
折鷹	同七拾銭	
緑片	同六拾銭	
初雁	同五拾銭	
雁金	同四拾銭	
並雁金	同参拾五銭	
玉枝	同弐拾八銭	
松之緑	金九拾銭	
老松	同八拾五銭	
霜之花	同七拾銭	
花橘	同六拾銭	
澗之花	同五拾銭	
正喜撰	同四拾五銭	
折松葉	同四拾銭	
朝日	同五拾銭	
喜撰	同四拾銭	
並喜撰	同参拾銭	
山吹	同弐拾五銭	
一森	同弐拾銭	
稀上川柳	同拾五銭	
上川柳	同拾銭	
川柳	同拾六銭	
煎花粉	同弐拾銭	
同	同拾五銭	
同炉粉	同八銭	
煎茶製	量目弐百目 壱斤ニ付	

製造元
山城国宇治郡宇治村大字木幡
東松尾茶館
松尾清之丞

厚狭郡
一手販売
特約店
山口県長門国厚狭郡船木町
俟命堂
中原卯兵衛

印行所　京都三条　合資商報会社

□資料29　松尾清之丞引札



□資料29　松尾清之丞引札（収蔵資料№1412）

れた宇治茶業界が生んだ一人の逸物と言っていいだろう。

さて、価格表中央のおおむねを占めるのが「玉露製」、圧倒的に玉露が幅を効かせる時期に突入した感がある。別製の瑞春を筆頭に末尾にその出物を並べ、なんと二六銘柄を数える。価格帯も六〇銭から六円とずいぶんと幅が広い。これとはまったく別に、その左上に「玉露製団茶」の別枠が設けられる。「団茶」、「文人玉」の表記は、文人向けに中国の団茶を真似て作られた商品などではなく、その仕上がりの丸まった形状を中国風のイメージに当てはめてのネーミングであろう。

（押印）「前金卸売ハ此定価ヨリ弐割引」
明治三拾三年壱月改正

御茶銘録定価表

大日本農産品評会
有功壱等賞

京都博覧会
有功銀牌

（賞牌印影）

山城物産共進会
一等賞銀盃

第二回内国博覧会
有功壱等賞

京都品評会
壱等賞金牌

（賞牌印影）

第四回内国
勧業博覧会
有功壱等賞

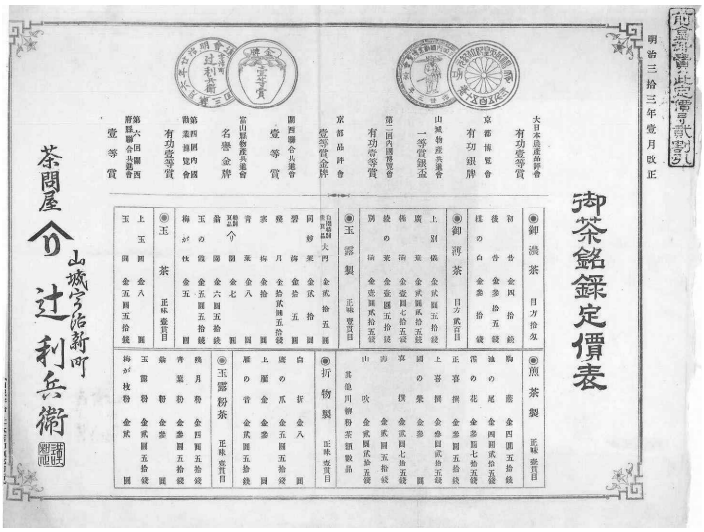
富山県物産共進会
名誉金牌

第六回関西
府県連合共進会
壱等賞

茶問屋　山城宇治新町（屋号）辻利兵衛（印影）

御濃茶	目方拾匁	
初昔	金四拾銭	
後昔	金参拾五銭	
楳の白	金参拾銭	
御薄茶	目方弐百目	
上別儀	金弐円五拾銭	
広葉	金弐円五拾五銭	
極揃	金壱円七拾五銭	
綾の葉	金壱円五拾銭	
別揃	金壱円弐拾五銭	
玉露	正味壱貫目	
自園特別	大門金弐拾五円	
佳良品	金弐拾円	
同妙楽	金拾五円	
碧海	金拾弐円五拾銭	
残月	金拾円	
寒梅	金八円	
青葉		
特別良品（ヤマリ）園	金七円	
翁園	金六円五拾銭	
玉の霞	金五円五拾銭	
梅が枝	金五円	
玉茶	正味壱貫目	
上玉円	金八円	
玉円	金五円五拾銭	
煎茶製	正味壱貫目	
駒蔭	金四円五拾銭	
池の尾	金四円弐拾五銭	
霜の花	金参円七拾五銭	
正喜撰	金参円五拾銭	
上喜撰	金参円弐拾五銭	
国の栄	金参円	
喜撰	金弐円七拾五銭	
寿	金弐円五拾銭	
山吹	金弐円弐拾五銭	
其他川柳粉茶類数品		
折物製	正味壱貫目	
白折	金八円	
鷹の爪	金五円五拾銭	
上雁金	金参円	
雁の音	金弐円五拾銭	
玉露粉茶	正味壱貫目	
残月粉	金四円五拾銭	
青葉粉	金参円五拾銭	
翁粉	金参円	
玉露粉	金弐円五拾銭	
梅が枝粉	金弐円	

□資料30　辻利兵衛引札



□資料30　辻利兵衛引札（収蔵資料№1791）

宇治　辻利兵衛

最後に、やはり明治の宇治茶業界を牽引した辻利兵衛（一八四四～一九二七）の引札をとりあげる。世代的には、上林松寿と松尾清之丞のちょうど中間くらいである。彼が開発し好評を得た「大門」が、「玉露製」のトップに掲げられる。小売店向けの価格表と見られ、濃茶・薄茶以外は一貫目（一〇〇〇匁）単価の表記になっている。そのため、一見異様な高額にみえるが、通常の二百目に換算すると、むしろ東松尾よりも安くなる。さらに、右上の押印に代金前払いは二割引きとあるので、ずいぶんとお得な印象をうける設定である。そしてここにもやはり「玉茶」がある。

玉露製の「自園特別佳良品大門」以下は針状の仕上がり、「玉茶」は従来の、そしてもうすっかり時代遅れとなった丸くよじれた形状の茶葉、そんなふうにみてほぼ間違いないと思う。ちなみに、辻利兵衛茶舗の価格表で「玉茶」の記載が確認できるのはこの一点のみである。

おわりに

高級煎茶が碾茶の出物から玉茶（玉類）へ、そしてその形状重視の傾向が著しく進み、玉状から針状へと変化した、最終的に玉露として一般化する過程が、価格表の分析によってもおおよそ裏付けられたように思う。

京都府茶業研究所の初代所長を務めた田辺貢は、次のように述懐する。

「製造の骨子たる揉切は宇治に起こりたるものにして純粋の宇治製法は回転揉、仕上揉総て揉切によりたるものなり。従って助炭に鉄板あじろ等全く無く、手を合わす力のみにて揉みたるものなり。故に形伸びずして、太く稍曲がり、色沢も黒緑を帯びたるものなりしが、味に於いては現在のものの及ばざる甘味を有せり。」

「デングリ製は静岡に起こりたるものの如く、静岡にては此方法によるもの多し。又コクリによる仕上揉も静岡に於いて盛んなり。」

「板摺は宇治地方にても盛んにして殆んど仕上は之に依るも、元は三重県水澤に起こりたるものなり。」

「現今の製法は色沢本位、或いは形状本位の製法に傾き、香味の点旧来のものに劣る嫌あるを以て注意せざるべからず。」

（『茶樹栽培及製茶法』昭和九年）

「純粋の宇治製法」つまりここでいう玉茶（玉類）の製造法は、両手で茶葉を揉み切って乾燥させることに特徴があり、色は黒ずんで見えるが、一般的な玉露よりも甘みがあること、そしてデングリ、コクリとよばれる、助炭に押し付けたり、束ねるようにして葉を伸張させたりする手法は静岡からもたらされたもので、仕上げの工程で行う板摺（イタズリ）も三重県水澤を発祥とするものだと述べる。そして後者の方法をもってすると、形状はよく見えるものの、香味は劣るという。

ここで主に取り上げてきた高級茶とともに、「宇治煎茶」

と呼ばれ日常的に飲まれた普段使いの茶があり、多くの引札にその代表としてあった。ただ、江戸や東京で出回ったそれは、必ずしも宇治とその周辺の産とは限らないことも自ずと了解されての「宇治煎茶」だったと推察されることも、すでに述べた。

「宇治製法」、そして「宇治煎茶」も、その名称からイメージされるものと、実態が離れてはいくものの、業界ではそうしたことが黙認されながら広く受容された。今日空前の活況を呈する「宇治抹茶」と、どこか通じるところがあるように思えて仕方がない。

＊田辺貢『茶樹栽培及製茶法』は、桑原秀樹氏のご教示による。

番号	資料名	表題等	住所等	年代	寸法(mm)	収蔵資料No.
17	竹田紹清引札①	御茶銘目録	洛巽宇治　竹田紹清	―	188×295	個人蔵
18	竹田紹清引札②	御茶銘目録	山城国久世郡宇治町竹田紹清	―	156×260	個人蔵
19	上林三入引札	茶名価記	山城宇治　上林三入	明治12・1879	163×260	個人蔵
20	松阪儀右衛門引札	御茶銘品目	山城国久世郡宇治町銘茶売捌所　玉露園松阪儀右衛門	明治16・1883	172×262	個人蔵
21	長井藤吾引札	茶銘価格表	京都府下山城国久世郡茶業組合員　宇治町製造販売人　長井藤吾	明治17・1884	180×232	個人蔵
22	上林三入引札	茶銘価記	京都府下山城国久世郡宇治町　茶業組合員上林三入	明治17・1884	190×260	個人蔵
23	松尾太右衛門引札	御茶名表	宇治木幡　松尾太右衛門	明治11・1878	188×279	1407
24	小山伊兵衛引札	御用御茶所	京都烏丸通二条上ル東側北寄　御用御茶所小山伊兵衛	―	164×670	1672
25	美濃部忠兵衛引札①	御茶銘目録	京柳馬場通綾小路下西側　御用御茶所　美濃部忠兵衛	甲子(元治元)・1864	163×425	1991
26	美濃部忠兵衛引札②	御茶銘目録	京柳馬場通綾小路下西側　御用御茶所　美濃部忠兵衛	己巳(明治2)・1869	163×425	1992
27	美濃部忠兵衛引札③	御茶銘録並価表	御茶調進所　京都柳馬場綾小路南入西側　本店美濃部忠兵衛	―	150×406	個人蔵
28	美濃部忠兵衛引札④	御茶銘録並価表	御茶調進所　京都柳馬場通綾小路下ル西側美濃部忠兵衛	―	167×543	1892
29	松尾清之丞引札	精製茶銘価録	製造元　山城国宇治郡宇治村大字木幡　東松尾茶館　松尾清之丞	―	255×355	1412
30	辻利兵衛引札	御茶銘録定価表	茶問屋　山城宇治新町辻利兵衛	明治33・1900	168×266	1791

□掲載資料一覧

番号	資料名	表題等	住所等	年代	寸法(mm)	収蔵資料No.
1	井筒屋利助引札	宇治信楽諸国御銘茶問屋	両国薬研堀不動前角松寿軒井筒屋利助	文化14・1817	439394	336
2	山本加兵衛引札	宇治信楽諸国御茶所	江戸日本橋通弐丁目都竜軒本家山本加兵衛	文政6・1823	250×340	2222
3	山本嘉兵衛引札	宇治信楽諸国御茶所	東京日本橋通弐丁目本家山本嘉兵衛	大正4・1915	249×344	359
4	伊勢屋治兵衛引札	宇治信楽諸国御茶所	江戸東両国大徳院門前両替伊勢屋治兵衛	―	229×321	318
5	大坂屋吉左衛門引札	諸国御茶所	浅草御門外角　大阪屋吉左衛門　茶師松峯軒	―	280×409	2223
6	松屋与兵衛引札	宇治信楽諸国御銘茶所	東京浅草吉野町　茶師松風軒松屋与兵衛	―	250×334	2201
7	蕗屋平兵衛引札	宇治諸国信楽御茶所	大坂順慶町通井戸ノ辻蕗屋甚兵衛	天保6・1835	242×323	436-24
8	斉藤又右衛門引札	諸国御茶所	湖松軒　大坂北新地壱丁目　斎藤又右衛門	辰	250×330	436-36
9	笹屋伊兵衛引札	宇治信楽諸国御茶所	雲花園　大阪本町通心斎橋筋角　笹屋伊兵衛	―	244×328	436-30
10	笠屋藤兵衛引札	宇治信楽諸国御茶処	京町堀二丁目羽子板橋北詰角　薫香堂笠屋藤兵衛	―	162×541	436-1
11	八木弥三兵衛引札	宇治信楽諸国御茶処	通栄軒　大坂淀屋橋梶木町南入　八木弥三兵衛	―	245×334	436-29
12	木屋新助引札	宇治信楽諸国御茶処	通松軒　大坂平野町筋京町橋東エ入　木屋新助	―	249×336	436-31
13	俵谷金兵衛引札	宇治信楽諸国御銘茶製所	浪花江戸堀二丁目犬斎橋北詰西江入　俵谷金兵衛	嘉永7・1854	173×246	436-3
14	高田弥十郎引札	宇治信楽諸国御茶所	芳雲園　大坂心斎橋北詰北詰角　高田彌十郎	―	239×339	436-35
15	川崎喜兵衛引札	諸国名物御茶所	大阪高麗橋三丁目佳茗林　川崎喜兵衛	―	181×498	436-23
16	川内谷新兵衛引札	宇治信楽諸国御茶所	大阪天神橋通寺町橋北へ入　本家川内谷新兵衛	文久3・1863	230×320	2200

収蔵資料調査報告書

収蔵文書調査報告書１	「白川金色院」と恵心院	1998年(平成10)
収蔵文書調査報告書２	笠取地域の古文書	1999年(平成11)
収蔵文書調査報告書３	上林三入家文書	2000年(平成12)
収蔵文書調査報告書４	宇治上神社文書	2001年(平成13)
収蔵文書調査報告書５	巨椋池漁師仲間文書	2002年(平成14)
収蔵文書調査報告書６	上林春松家文書	2004年(平成16)
収蔵文書調査報告書７	白川・藤川家文書	2005年(平成17)
収蔵資料調査報告書８	戦争関係資料	2006年(平成18)
収蔵資料調査報告書９	上林春松家文書２	2007年(平成19)
収蔵資料調査報告書10	幕末の銅版画	2008年(平成20)
収蔵資料調査報告書11	宇治市の写真資料１	2009年(平成21)
収蔵資料調査報告書12	宇治市の写真資料２	2010年(平成22)
収蔵資料調査報告書13	宇治市の写真資料３	2011年(平成23)
収蔵資料調査報告書14	絵ハガキ１	2012年(平成24)
収蔵資料調査報告書15	片岡道二家文書	2013年(平成25)
収蔵資料調査報告書16	宇治市の写真資料４	2014年(平成26)
収蔵資料調査報告書17	京都社寺境内図	2015年(平成27)
収蔵資料調査報告書18	戦争関係資料２	2016年(平成28)
収蔵資料調査報告書19	宇治茶の民具	2017年(平成29)
収蔵資料調査報告書20	宇治郷の古文書	2018年(平成30)
収蔵資料調査報告書21	上林味卜家文書	2019年(平成31)

※７までは、『収蔵文書調査報告書』として刊行した。

収蔵資料調査報告書22
宇治茶の引札

2020年(令和2) 3月31日

編集・発行　宇治市歴史資料館
〒611－0023
宇治市折居台 1－1
TEL (0774)39-9260
FAX (0774)39-9261
E-mail：shiryoukan@city.uji.kyoto.jp